① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第12巻　第11号　1967年11月25日　大町山岳博物館

遭難に思う

北アで相変らず遭難が跡をたたない。夏山秋山…これからの冬山も必ず死者が出ることはいままでの統計でわかっている。

遭難対策が唱えられてやかましいが、私は三千M級の山が林立する北アで、遭難零は不可能だと大町三年在住してつくづく思った。〃山ではなく岳だ〃とある山小屋人がいったという。確かにそうだ。私自身がこの三年間夏の最盛期に、女性向きといわれる白馬岳へ登って落石に二度あった。大雪渓の登山ラッシュ取材が目的だったが、そのとき落石で一人ケガ人が出たという話を聞いて、北アの山はやはりきびしいと思った。以前、落石の直撃を受けて死んだ女性登山者があったという

大町警察署を巡回しているとことしも夏山で八峰キレット、不帰の嶮などときどき転落による死者が出た。酷暑を避けて北アへ来る一般登山者のために県、大町市、白馬村はもっと安全な登山道を造るよう努力してほしい

冬山登山はしろうとにはむりだ。この秋も蓮華岳で東京・小西六の会社員二人が疲労凍死、鹿島槍で神戸の会社員一人が行くえ不明になった。いずれも山を知らず、秋山だと思い込んで軽装備、ハイキングでもするつもりで登ったのが遭難の原因。秋山というのは北アでは九月中旬まで、その後はいったん天気が悪くなれば冬山と同じ様相をみせる。遭難するのは他県のパーテーばかり。地元の人たちが無謀登山をしないのは山のこわさをよく知っているからだ。県の遭対協がいくら遭難防止を呼びかけても、他県の人たちへPRが徹底しないため、いつまでたっても無謀遭難がなくならない。経験豊かなパーティーでも死ぬことはあるが、これは仕方がないとしても、初めから遭難確実パーティーをなんら規制もせず冬山へ入山させるのはどうかと思う遭対協の呼びかけ程度ではききめがなくなってきた現在、好ましいことではないが、入山規制の条例を県がそろそろ検討してもよい時期ではないかと思う。

（蒲　亘一）

唐沢岳「幕岩」

長沢修介

七月十三日（木）

〆切日のせまった唐沢岳の原稿をやっと仕上げ、一段落といった所、近頃、会の若い人達が岩登りに精を出していて、しきりと私をさそう。今度の土・日に幕岩へ出掛けようと話をまとめる。午後から雨。夕刻になって幕岩で一人墜落死したのを知る。発送の原稿を取りやめあわてて追加、唐沢岳で始めての犠牲者だ。

七月十四日（金）

昨日のアクシデントの原因や会及びどのルートを取ったかを知りたくてあちこちを調べてみるが会の名前が判明したのみで、ルート及び状況等は全々不明である。

警察へ聞いてみても壁を下降中、土砂崩落によりバランスを失ったとしか解らずどのルートかは手掛もつかむことができなかった。いずれにせよ唐沢岳の幕岩は二～三のパーテーによってすでに手をつけられていることだけは事実となり、唐沢岳も最后の部分の開発期に入った事を感ずる。午后若い人達と会今度の土・日の幕岩行きは丁度遺体の下山と同じ日になるので中止と決定。

七月二十日（木）

夜、定例の会合に集る。幕岩のことでひとしきり話題に花が咲くが、来月末の国体予選の準備で忙殺される。終り頃、来週の日曜に四人で幕岩へ偵察に入ることを決める。

七月三十日（日）

朝六時、駅前に行って観光協会に寄り入山届を出す。遭対協の人がいて

「唐沢幕岩ですか、先日事故があったというのにこの間から大パーテーが入っていますよ。何であんな壁に登るのですかね。」

とちょっぴり皮肉を言われる。

しかし唐沢岳の開発を最初から手がけて来た我々も知らぬ間に多くのパイオニア達はやはりあの大きな壁に魅せられ、開発に乗り出している事は驚きであり、又我々の不勉強さ、努力の足りなさを痛感せざるを得なかったまして一部ルート図もでき、試登の段階に入っている事を知るや、我々は大きく遅れを取っていることを知らされた。

時間になっても仲間が現れないので長距離電話を入れてみると、急用ができて二人共来られないとのこと。がっかりしていると会の仲間が現れ、国体予選ルート下見に爺ガ岳へ行くという。涙をのんで私達二人もそちらに同行を決定、コバイケイソウの真白に咲いた、種池小屋の前から、はるか南の唐沢岳をうらめしくながめる。剣岳がオオシラビソの枝越しにどっしりとかまえ、キンポウゲが美しく咲き競い、ルリビタキの声が一つぱいで、はなやいだ若い登山者の列が稜線をうずめつくしていた。山は今一番にぎやかな季節なのであろう。

帰途ブッシュで判明しないような道を歩きながらしきりと幕岩のことが気にかかる。

八月三日（木）

会の定例会に出席、先日までに知り得た経過を話す。先日大挙して幕岩に入山したパーテーはどうなっただろうか。無事完登したろうか。我々の観念では幕岩は一朝一夕の簡単な事では登攀できないことは知っているが、今度の火曜に、再度偵察山行を決定、どうしても今度は入山して、他の山岳会がどの程度進んでいるかを見極ることにする。

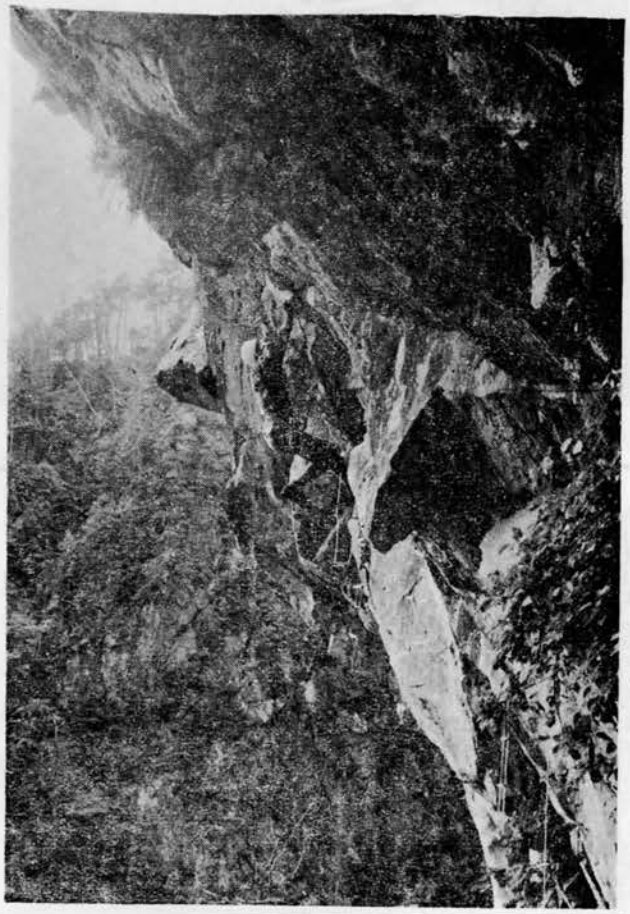
八月八日（火）

偵察には最適の快晴であった。七倉からの軌道は東京電力のダム工事のため所々工事中であって来年になるともっと大がかりな本格的工事が始まるとか、高瀬川の渓谷美もあと二～三年したら今の黒部ダムのように大きく変るだろうと思い、何かさびしさを感ずる。三ノ沢橋からカラ沢への入口附近も、地質調査ボーリングや工事場ができ、全く昔の静かな姿が消えてしまい、文明の波が大きく打ち寄せていた。同行の二人は幕岩へは始めてとあって、沢のルートや名称を説明しながら、ゆっくりと入山、金時の滝附近まで来るとやっと昔のカラ沢に入った感がする。この附近までは工事の人も入らず、昔のままの山の姿があった。金時の滝を越えると目の前に被いかぶさるように幕岩がせまって来る。同行の二人も「これはでかい!!」と一言、あとは黙って壁を仰ぎ見る。

入山の道々、各所につけられた標識布やルート工作のあとから、相当数のパーテーが入山している様子、もう一つ位のルートが完登されているのではないかと思い、急いで幕岩の取付き点の鷲滝まで登る。B沢の水を集めて、鷲滝となってカラ沢に合するこの滝は、昔と変らぬ姿を留めているのに対して、幕岩自体は大きくその姿を変えているのに驚かされた。

総体この唐沢は、数年前の台風の折、風の通路に当って、各所に大きな被害を蒙り、風倒木が山積し、土砂崩落が相次いで大きく変貌したことは先年の三月、唐沢岳集中登山を行なった折に知ってはいたものの、こんなに大きな変貌をしたとは思わなかった。

唐沢開発の初期に始めて幕岩を見た時は、もっと陰うつな感じであったのが、今こうし



下部ハング帯登はん

てみるこの壁はずっと明るい感じになり、上部が大きく崩落したため、そのスケールも以前の倍の大きさになっている。

ともかく鷲滝を越えてB沢に入り、どっしり腰をすえてプリズムを出してゆっくり観察することにする。

幕岩の中心部は下部及び上部に大ハング帯を持ち、中間及び最上部は急傾斜のスラブ帯で構成され、右稜は急な草付きをまじえた稜で最上部は大きなドーム状となってつき上げている。その左側に白いルンゼ状のものがあるがこれは上部の大ハング帯に二段の大きなチムニーとなって消えている。

中間のスラブ帯は白いルンゼ側にカン木帯がありこれは上部ハング帯まで続いている。又このスラブの丁度中間辺りに三つの大きなハングがありこのうち二つは人間がサングラスをかけたように見える所から我々は「サングラスのハング」と呼ぶことにした。上部ハング帯の左側の方が大きくバットレス状となり上部の白いスラブ帯へと続いている。さらにその左側はルンゼ状となり下部はブッシュまじりの壁となってB沢へ落ちている。

この岩壁は西向きであるので、夏の時期でも正午を過ぎないと壁全体に日が当らず我々がこの壁の下についた十時の時に、正に壁の上部から太陽がギラギラと現れ始めたところであった。

あまりの大きさにのまれてか、しばらくは首の痛いのも忘れて仰ぎ見ていたが、偵察の意を忘れず、右稜側から調べてみる。

右稜へ取り付く急なルンゼをしばらくのぼると、草付きに明らかに踏み跡が見つかる。しかも多人数の跡だ。先日の大パーテーはこのルンゼより右稜及び壁に取り付いたことを知る。プリズムを出し壁を良く見ると、白いルンゼ左側の凹角に点々と新らしいボルトが、又その基部に取付き点を示す赤布が見付かる。しかしあの上部の大ハングをどのようにして越したろうか、恐らく越えてはいないだろうなど話しながら右稜へ取り付いてみると、明らかに何人もの人が上下した跡があり、これをサポートルートに使い壁のカン木帯を登ったのだと推察できた。しかし上部の大ハングは恐らく越えないだろうというのが我々のこの時の見方であった。右稜の傾斜が急になったので探入りすることを止め、鷲滝上に戻って中昼、今度はB沢をのぼってみる。二つ小さな滝を越すと右手に我々が始めてこの沢に入った時名づけた熊穴があり、その下に、沢山の花が枯れて集っており、先日のアクシデントはこの上部で起きたことを知らされる。予想した通りその上部の大クラックに点々とボルトが見え、下部ハング乗越し地点には、カラビナも、さらにその上部のバンドにはザイルが見えたのでこの附近から落ちたのだろうと話しながらあちこちとルートを探す。

結局、滝上に戻って再度協議の結果、壁の両端を他の山岳会が始めているのなら我々は、下部ハング帯の逆V字状の節理より取り付き、サングラスのハングの間（我々は鼻と名づけた）をぬけ、中間スラブ帯を左上してバットレス状の所を登り、上部の白いスラブへ出るという本当の真正面のルートを選んだ。

この大計画を建てるや我々は一面に夏の日射を受ける幕岩を後に一路カラ沢を下り下山した。

以上は今年の幕岩試登決定までの日記からのぬき書きであるが、八月のお盆の十三日から会の若手五人が前記下部ハング逆V字から取り付き始めたが、下部ハングへ取り着く迄に何本ものフィックスを使用し、又このハングは大きく張り出しており、ハング基部より見ると約十mは外に出てていて中は岩燕の集団営巣場で、アブミに乗つてボルトの連打であった。三日間の試登でわずか二十五mそこそこしかのぼすことができず、再度を約して下山という日。又しても第二のアクシデントがあった。事故は我々の会と前後して入山したパーテーで我々の通っていた下部ハング帯の小洞穴よりB沢へ約一〇〇mの墜落であった。丁度私達の仲間は下にいたので、すぐ現場に急行したが間もなく死亡してしまった。

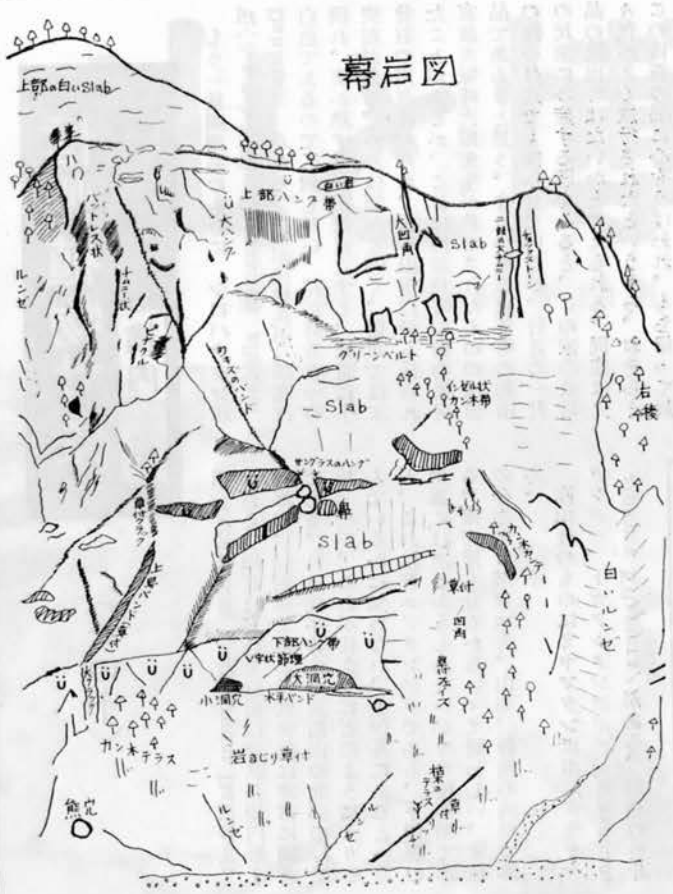
この遺体の搬出で、第一の犠牲者を出したグループ・ド・コルデ、及び第二の犠牲者を出した月稜会と情報を交換し合い、まだ何処のパーテーも完登はしていない事を知った。又現在取り付いているのは、左側の大クラックからバットレス状中程迄進んでいるのがグループ・ド・コルデ、右稜及び白いルンゼ側のカン木状からは登嶺会であることが判明した。どの会もこの岩のスケールの大きいことと、取付いたら最後、留り場となるテラスがなく、特に中間のスラブ帯は傾斜もきつく、フリクションの良くきく日本ではめずらしい岩場であることをもらしていた。

我々も再度の入山を期したがついに八月は他の行事に追われて決行できずじまいになってしまった。

九月の中旬、今度は他のルートの偵察をかねて、ザイル二四〇m、アブミ四〇、ボルト六〇、ハーケン一〇〇、フィックス用ワイヤー五〇mその他大量の器材をもって十三人の大勢で入山したが天候に災されて思うように成果があがらず、下部ハング帯の乗越しまでのぼすことができたに過ぎなかった。右稜はドーム下部迄を登嶺会のあとを登ったが、それ以上、ドームへの登ったあとは見受けられなかった。

十月の初めに再度計画をしたがついに計画が流れてしまい、紅葉の頃コルデの人達が入山したと聞いたが、完登したかどうかは不明のまゝついに今年は雪の季節となってしまった。

（大町山の会）



信州植物寸景

横内　斎

（その十）

もう一種関西系のものに　シロバナタンポポ（シロタンポポ）Taraxacum albidum Dahlstedt がある、全体が淡緑色で、頭花は白色であるので区別し易い、花が終ると一時倒れ、実が熟するとまた直立する、総苞に小突起がある。外片は短かく開く、信州では木曾谷の南部に知られ、松本旧市内でも採られたことがあるが、これは同市袋町の植物研究家故犬塚時次郎先生が栽培されたものの逸出品であろうと思う。また小県郡東部町の和田の池の付近でも採られているが、付近の一軒の民家に多産する所をみると、この家の栽培品の逸出ではないかと考えられる。同家は先々代がよく旅行されたというから、おそらくこの白花の品に心をうばわれ、もち帰って栽植したらしく、家の周囲にいっぱい広がっている、本種は東海道、関東以西、四国、九州に分布する。

タンポポ属中の珍品に　ウスギタンポポ（シナノタンポポ）Taraxacum shinanense H. Koidzumi がある、全体他のタンポポよりも軟弱で、なかなかに大きくなる、花は淡黄色で、花茎は花時、花と同長かまたは短かい、付属物の角状小突起は小さい、海抜五〇〇m～一三〇〇mぐらいの高度の間に帯状に分布し、それより低い所にも高い所にも見出せない、はじめて信州に見出されたのでシナノタンポポの異名がある、埴科郡地蔵峠、下高井郡山ノ内町金倉鉱山跡、中野市長丘丘陵、同箱山峠、飯山市秋津宝蔵、下水内郡豊田村、更級郡大岡村樺内、同村たらら山麓の池付近で長野市旭山などにみつかっている、裏日本系のものである。

もう一種平地産のものに　カントウタンポポ Taraxacum platycarpum Dahlstedt がある、頭花は黄色で総苞は卵状長楕円形～卵形で、付属物である角状突起は非常に顕著である、私は先年佐久の荒船山の北側の峠で採ったが、これが佐久平にどのように入りこんでいるかは知らない、上伊那にあるというが、これは皆エゾタンポポである、下伊那の南部にはあるかもしれないが今の所不明である。南安産も分布からいって疑わしい、本種の分布地は関東地方、山梨、静岡の両県である。

高山性のものにミヤマタンポポ（タチヤマタンポポ、トガクシタンポポ）Taraxacum alpicora Kitamura がある、総苞の外片は長いだ円状の披針形で、付属物の突起はない、総苞に白粉がある、立山、槍穂高の連峯、燕連山、戸隠山などに産する、これに総苞に突起があり、舌状花が比較的多く、にぎやかにみえるものに　シロウマタンポポ var. shiroumense Kitamura があり、白馬連山に産する。

南方の高山に産するものに、　ヤツガタケタンポポ Taraxacum yatsugatakense H. Koidzumi がある、頭花は黄色で総苞の外片は卵形で短かく、内片の二分の一に達しない、舌状花も前者より少いらしく、なんとなく貧弱な感がする、八ヶ岳と南アルプスの諸山に産するが、聖岳をもって南限とするらしい。

外国からきて帰化しているものに、　セイヨウタンポポ Taraxacum officinala Weber がある、頭花は黄色で、総苞の外片は反曲してたれるのですぐにわかる、草体も邦産のものに比して小形であり、従って花も小形である、全体淡い緑白色の感じがする、欧州原産のものである。信州で初めて記録されたのは、大正九年頃で、もとの松本女子師範学校や松本五十聯隊などの土堤であった、記録者は当時の松本女子師範学校教諭小泉秀雄先生であった、本品が近頃都会から農村にまで広がり、ことに駅や主要な道路の土堤にまで進出しているのを見掛けるようになった、上高地や菅平などの山地の観光地にまで侵入してきている。一種これに似たもので大形のものがあり、総苞の外片は反曲し、花も大きい、本種の別品種であるか、或いはエゾタンポポとの間種であるかもしれない、信大教育学部の校庭、諏訪市の信大理学部付属諏訪臨湖実験所の庭などでみている。

カモシカ死亡

今年に入って保護されたカモシカ葛子は11月12日上子は11月21日、死亡した、原因は老衰であると解剖の結果判り、現在の飼育数は三頭になった。

お願い　「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円（送料共）大町山岳博物館宛お送り下さい。（切手は不可）

表紙説明

エナガ

撮影　中村登流

山と博物館　第12巻第11号
一九六七年十一月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）二二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部
定価　年額　三〇〇円（送料共）